「教育臨床総合研究23　2024研究」

令和５年度の基礎体験領域の取り組み

A Report on the Approaches in the Educational Support Fieldwork Area in 2023

錦織稔之*　村尾美幸*
Toshiyuki NISHIKORI　Miyuki MURAO
上代裕一*　飯島　仁*
Yuichi JODAI　Hitoshi IJIMA
長岡美沙*　原　丈貴**
Misa NAGAOKA　Taketaka HARA

要　旨

新型コロナウイルス感染症の拡大によって，様々な活動制限を受けながら実施してきた基礎体験活動であったが，令和５年５月８日に新型コロナウイルス感染症の位置づけが５類となったことに伴い，令和２年度より活動停止となっていた宿泊を伴う活動が再開されることとなった．また，３年次後期の「実習セメスター」も再開となり，この期間に多くの学生が母校実習に参加する機会を得ることができた．さらに，基礎体験活動の受入事業所に対する取り組みとして実施してきた「基礎体験活動連絡会議」も再開した．令和６年度４月の新入生を対象とした入門期セミナーでは，研修に組み込む形で，学生が受入事業所から直接活動内容の説明を聞く機会となっている「基礎体験活動合同説明会」も再開する予定である．教育支援センターが主催する各種セミナーについては，分散開催を基本として実施したが，２月の１・２年生基礎体験交流会は，１回あたりの参加人数を増やし，昨年度は３回に分けて開催していた形態を，今年度は２回の開催とした．行動制限の緩和が進み，基礎体験活動の運営状況もコロナ禍以前の状況にほぼ戻りつつある中で，これまでコロナ対策として実施してきた取り組みについては，適宜変更を加えながら運用を進める１年であった．

〔キーワード〕　基礎体験活動　コロナ対応　教職志向性向上　活動再開

Ⅰ　はじめに

令和２年度からのコロナ禍によって，基礎体験活動に限らず様々な活動が制限されていたが，新型コロナウイルス感染症の５類移行に伴い，行動制限の緩和が進められるようになった．その結果，基礎体験活動のプログラムも，まだ完全にとは言えない部分もあるが，ほぼコロナ禍前の状況に戻りつつある．令和５年度に再開した教育支援センターの教育プログラムとして，

*島根大学教育学部附属教育支援センター
**島根大学教育学部保健体育科教育専攻（附属教育支援センター長）

入門期セミナー（オンデマンドから対面実施へ），宿泊を伴う基礎体験活動，実習セメスター，基礎体験活動連絡会議が挙げられる．何れも過去に実施していたプログラムであるものの，コロナ禍以前の状況を知っている教育支援センター教員が限られるため，過去の資料等を参考に試行錯誤しながらの準備となり，コロナ禍前の状況を知らない担当教員にとっては，新規の取り組みを立ち上げるような感覚であった．このような状況下で，令和４年度から令和５年度にかけて，実施形態に変更があったものを【表１】にまとめた．

【表１】令和５年度に再開および変更された主な教育支援センターの活動

月日	取り組み	Ｒ４年度	Ｒ５年度
4/22 ～ 23	入門期セミナー	オンデマンド開催	対面開催（分散開催）
５月	宿泊を伴う基礎体験活動	中止	再開
５月	教育支援センター演習 学習指導案作成の時間認定	20 時間 + α / 本 提出本数上限無し	10 時間 + α / 本（6 月から） 通算５本まで．時間認定は９月までの時限措置
３年次後期	「スクール・インターンシップ」	中止	再開（6/9：「スクール・インターンシップ」説明会を開催）
2/5	１・２年生基礎体験交流会	分散開催（3 回）	分散開催（2 回）
3/8，13	基礎体験活動連絡会議	中止	再開（米子と松江の２会場開催）
３月	基礎体験活動合同説明会	R5 年４月中の開催を中止	R6 年度の入門期セミナーでの開催に向けて協議開始

コロナ禍で中止となっていたものの，令和５年度に再開された大きな取り組みとして実習セメスターが挙げられる．コロナ禍以前は，学校現場に対して実習セメスターにあわせて活動を提供してもらうよう，依頼していた．しかし，コロナ禍において実習セメスターが実施されない期間が続いたことから，（行動制限が少しずつ緩やかになるに従って）学校側から年間を通しての活動を提供していただけるようになった．そのため，学年に関係なく通年で学校現場へ出かけていく環境が提供できるようになり，コロナ禍前とは状況が変わったため，４年ぶりに実習セメスターを再開するにあたって，以下の方針を立てることとした．

- 教育支援センターから，各学校へ実習セメスターの活動を依頼しない．
- 実習セメスターに学校現場にて行う体験活動を「スクール・インターンシップ」とする．
- 実習セメスターに学校から新規の活動申込みがあった場合，３年生の優先登録期間を設け，その上で定員に満たない場合には，他学年にも開放する．
- オプション活動として，母校実習（県内・県外）も認めることとする．希望する学生は自身で母校と連絡を取り，受入が認められた時には教育支援センターより正式な依頼文書を発送する．

母校での実習を希望する学生はこれまでも一定数みられ，専攻別体験活動に位置づけて母校実習を実施してきた．今回，教育支援センター管轄の基礎体験活動として認める方針を学生に示したところ，多くの学生から参加の希望が出される結果となった．

受入事業所に対する「基礎体験活動連絡会議」も，コロナ禍により実施できていなかった．基礎体験活動の受入事業所は，本学部の学生教育において重要な役目を果たすパートナーでも

あり，学生教育の理念について大学側と受入先との共通理解をもつことは必須である．今年度３月には，米子会場と松江会場の２会場で基礎体験活動連絡会議を開催し，大学側と受入事業所のお互いの顔が直接見える状況で，基礎体験活動の理念や普段の指導状況の説明，基礎体験活動を通して多くの学びを得た学生の発表等を聞いてもらう機会を得ることができた．受入事業所からも様々なコメントが聞かれ，お互いの理解を深める上で重要な場であることを再確認するものであった．大学と地域が協働して学生を育てていく雰囲気を醸成できるよう，大切にしていきたい取り組みである．

新型コロナウイルス感染症の５類移行による行動制限の緩和は，教育支援センターの取り組み内容にも大きく影響するものであった．今年度の卒業生は，入学当初から新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた学年であり，入学当初は，基礎体験活動にほとんど参加できない状況であった．この学年には昨年度の認定時間補填措置も適用されたが，卒業要件に定められた540時間の規定時間は変更されることなくこれまでと同様の扱いであった．このような状況下で卒業生が540時間以上の基礎体験活動を積み重ねられたのは，学生の前向きな努力と教育支援センターの教員の献身的な学生サポートによる結果である．

本報告は，５類移行により行動制限が大きく緩和される中で，状況を把握しつつ適宜修正しながら進めてきたもの，あるいは，久しぶりの再開となるために既存でありながら新規事業に近い感覚で取り組んできたプログラムもあわせて，令和５年度の教育支援センターの取り組み内容を概説するものであり，今後のより充実した基礎体験活動の構築に向けて検討を行うものである．

Ⅱ　令和５年度の取り組み

１．基礎体験活動

⑴　基礎体験活動の参加実績（専攻別体験等を除く）

【表２】基礎体験活動への参加実績（過去10年間）

	H26	H27	H28	H29	H30	R01	R02	R03	R04	**R05**
受入団体数（団体）	206	181	184	183	192	188	93	133	160	**192**
募集活動数（件）	443	392	391	387	379	358	160	233	293	**389**
学生参加活動数(件)	253	323	337	327	319	303	147	203	278	**363**
参加学生延べ数(名)	2,396	2,223	2,305	1,818	1,913	1,985	1,554	1,691	1,868	**2,058**

平成16年度改組により基礎体験活動を卒業要件とするようになって以降，過去10年間の実績は【表２】に示すとおりである．補足しておくこととして，「参加学生延べ数」が平成29年度を境に大きく減少しているのは，同年度から教育学部の入学者募集定員を２割程度削減（170名→130名）したことが要因である．また，令和２・３・４年度はコロナ禍の影響を受けたが，今年度５月からは宿泊を伴う活動への参加も再開し，募集活動数は389件まで回復した．参加学生延べ数も2,058名と，コロナ禍以前に回復したどころか，現在の定員となった平成29年度以降の最多人数を記録するまでに至った．

参加学生延べ数をここまで回復・増加させることができたのは，宿泊を伴う活動を再開した

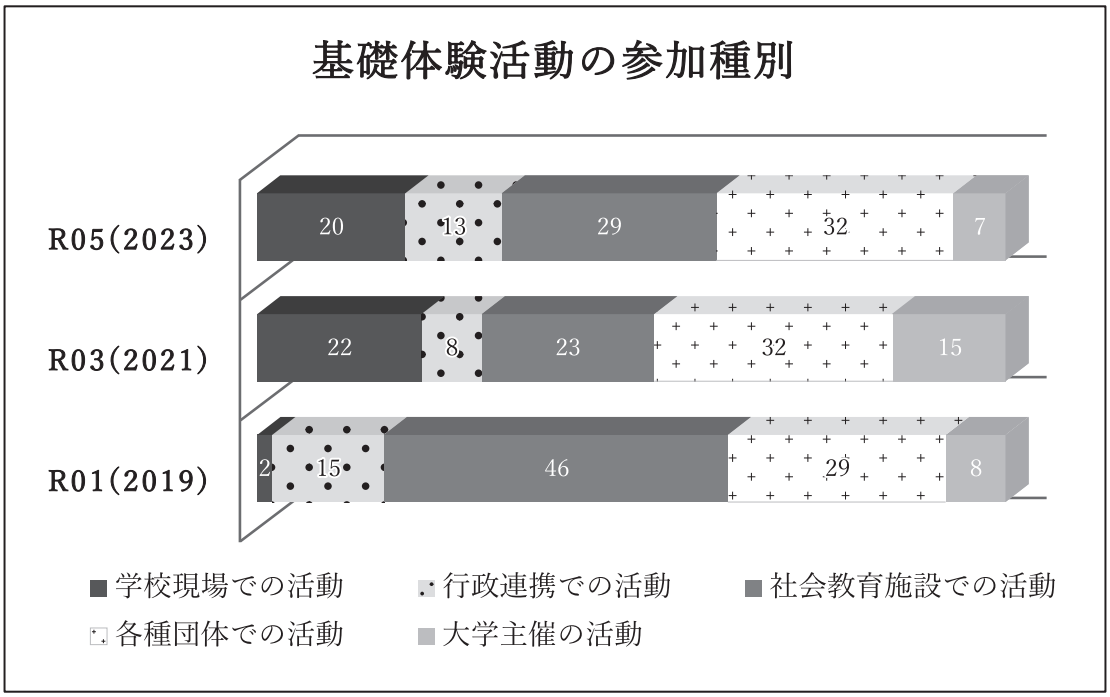
ことも要因ではあるが，それだけではなく，様々な形態の学校教育体験プログラムを設定したことも大きな要因と言えよう．コロナ禍以前，学校教育現場での基礎体験活動はそう多くはなく，３年次後期の「実習セメスター」に行っていた「スクール・インターンシップ」が中心であった．それがコロナ禍により中止を余儀なくされたことから，学年に関わらず通年で参加できるプログラムの開拓に努めたことがここ数年の動きである．とりわけ今年度からスタートしたものとして，「米子市小・中学校教育支援活動」と，「実習セメスター」の再開に伴って新設した「母校でのスクール・インターンシップ」を挙げておきたい．

「米子市小・中学校教育支援活動」は，米子市小・中学校長会の主催により，同市内 11 中学校区の小・中学校を受入先とした通年の学校教育体験活動である．今年度は 31 人が登録し，それぞれの学校で体験活動を行った．

「母校でのスクール・インターンシップ」は，「実習セメスター」の再開に伴って新設した学校教育体験活動である．コロナ禍以前の「実習セメスター」では，山陰両県の提携市町村（島根県内９市町村・鳥取県内８市町村）の公立小・中学校において，３年次生以上の学生に限って「スクール・インターンシップ」を受け入れていただいていた．それが，「松江市内小学校支援活動」（松江市小学校校長会主催）や先述の「米子市小・中学校教育支援活動」など，１年次生からでも参加できる通年の学校教育体験活動が増えてきたこともあり，新たな試みとして設定することにした．山陰両県内はもとより，山陰両県以外であっても，学生の母校であり，その母校が受け入れていただけるのであれば，基礎体験活動として認めることにした．その際には学生本人が最初の交渉役を務めることとした．初年度となる今年度は，３年生 32 人が延べ 38 校で「母校でのスクール・インターンシップ」を体験した．学校教育実習を行う附属義務教育学校とは異なり，また，「松江市内小学校支援活動」など山陰両県の公立小中学校とも違う山陰両県外の学校での体験活動に参加できたことは，とりわけ山陰両県外出身の学生たちにとって，出身都道府県の学校教育の実態を肌で感じ確かめることができたようで，ほとんどすべての学生が教職へ向かう意志をより強くしていた．

また，学生の教師力を高めるために新設した活動として，「新規採用の先生方（中学校：各教科）の研修でみがく教師力」を特筆しておきたい．これは大学主催の体験プログラムとして開設し，島根県教育センターと連携して，同センターで行われる「新任教職員研修」に参加できるようにしたものである．具体的には新任教員の模擬授業研修であり，学生が研修の参観に併せて，協議にも参加させてもらうことにより，実践的な教師力を身につける機会とした．

なお，【図１】は基礎体験活動の受入団体について種別ごとの割合を示したグラフである．以前は，同じ受入先での活動や，同じ種別の活動のみに偏って参加している学生が多数いたが，ここ数年でバランスの平準化が図れてきているように感じる．今後も学生たちに多岐にわたる種別の活動を提供できるよう努めるとともに，各受入先との連携も密にしながら，学生たちのさらなる教師力向上を支援していきたい．



【図１】　基礎体験活動の参加種別の変遷（過去５年間）

⑵　基礎体験セミナー等

①　基礎体験セミナー等の対応と実績

今年度は５月以降でコロナ対応が緩和されたものの，昨年度の実施方法を踏まえながら，学生にとって学びや親睦の機会が確保できるようセミナー開催の工夫に努めた．今年度の対応と実績は【表３】のとおりである．内容・時間を必要最小限とし分散開催したり，会場設営を工夫したりしながら，昨年度と同回数のセミナーを実施した．

【表３】　令和５年度基礎体験セミナー等（必修）の対応と実績

学年	セミナー名	認定時間	今年度の実績	対応等
1	入門期セミナー	22 時間	7 時間	2 日間の分散開催とした．不足時間分は基礎体験活動（選択）で補う．
	基礎体験 合同説明会	1 時間	中止	不足時間分は基礎体験活動（選択）で補う．
	地域理解 セミナー	3 時間	5 時間	教育支援センター演習の紹介を兼ねて，オンデマンド配信した教材視聴とレポート提出を課す形で実施．
	スタートアップ セミナー	3 時間	実施	午前・午後の分散開催．
1・2	基礎体験交流会	2 時間	実施	3 コマ・4 コマの分散開催．
2	充実期セミナー	2 時間	実施	3 コマ・4 コマの分散開催．
3	応用期セミナー	3 時間	実施	―
4	発展期セミナー	2 時間	実施	3 コマ・4 コマの分散開催．

② 入門期セミナー

本セミナーは新入生を対象に1000時間体験学修について理解し，同級生や上級生アドバイザーとの親睦を深めることを目的として実施されていたが，昨年度は対面実施ができなかった．しかし，基礎体験活動への参加手続きや仲間づくり等という重要な目的となることから，今年度は，感染防止策を講じた上で，１日の日程で２回に分散して開催した．詳細は以下のとおりである．

入門期セミナー2023の実施概要

【1．目的】

⑴ 新入生同士の親睦（横のつながり）や上級生との親睦（縦のつながり）を促すとともに，新入生の心配・不安・疑問等の共有・解消を図る．

⑵ １０００時間体験学修「基礎体験活動（選択）」に係る内容や参加手続き等の理解や学修意欲の向上を図る．

【2．対象】１年生　140名

※上級生アドバイザー（４年生）　24名

【3．日時】

⑴1回目（A，Bクラス）　令和５年４月22日（土）　10：00～16：00

⑵2回目（C，Dクラス）　令和５年４月23日（日）　10：00～16：00

※「学校教育実践研究Ⅰ」のクラスとグループを活用.

※各回は12グループで構成し，１グループの学生数は５～６名.

※参加学生……出席とアンケート提出により７時間認定.

※不参加学生……補講（全体指導・基礎体験活動と見通し発表）とアンケート提出により１時間認定.

【4．会場】大学会館３階　大集会室

【5．日程】

10:00	10:15	11:00	11:10	12:15	13:30	14:30	15:00	15:10	15:50	16:00
開会行事	研修１	休憩	研修２	昼食・休憩	研修３	研修４	休憩	研修５	閉会行事	

【6．内容】

⑴開会行事【15分】

①挨拶（教育支援センター長の話）

②趣旨・日程説明

③教育支援センタースタッフと上級生アドバイザーの紹介

⑵研修１「アイスブレイクとレクリエーションゲーム」【45分】

⑶研修２「基礎体験領域について」【45分】

○基礎体験活動（選択）への参加手続きやきまり，マナー等の説明

⑷研修３「主な基礎体験活動の紹介」【60分】

※内訳は，学校現場における活動２件，行政連携における活動２件，社会教育施設での活動２件，各種団体における活動２件を目安とする

⑸研修４「グループ協議」【30 分】

○大学生活や基礎体験活動についての意見交換（上級生が各グループに２名ずつ入って進行する）

⑹研修５　①「各専攻別のポスターセッション」【20 分】

②「各専攻別の相談会」【20 分】

⑺閉会行事【10 分】

○学生の感想発表

○諸連絡

入門期セミナーアイスブレイクの様子

入門期セミナーグループ協議の様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい．

教職員の振り返り（一部抜粋）

○対面で実施できた．専攻別発表もあり，様々な研修活動を取り入れた点がよかった．

○上級生アドバイザーが大変活躍しており，１年生の活動が充実した．

○研修内容（説明が重複しないように）や研修の順番について見直す必要がある．アイスブレイクの後にディスカッションができると，話もはずむだろう．

学生の感想（一部抜粋）

○アイスブレイクやグループ協議を通して，グループのみんなとの関係がさらに深まり，以前に比べて他の人と話しやすくなった．また，1000 時間体験学修への不安が大きく，無事達成できるか疑問に思っていたけど，セミナーでその不安が解消され，むしろ基礎体験活動への参加が楽しみになった．

○先輩方から専攻について良い部分も大変な部分も聞くことができた．今学んでおられる方から聞くからこその学びがあったと感じた．また 1000 時間体験についてもたくさん伺えたのでこれから計画的に実行していきたい．

○1000 時間体験に興味があって島根大学に入ったので４年間を通してしっかり地域貢献をしていきたい．これらに参加するためには自身の予定の管理などもできないといけないと思うので，時間管理の力も伸ばしていきたい．

③　スタートアップセミナー

本セミナーは，１年生が対象の基礎体験セミナーである．入学してから半年が過ぎたところで，初めて取り組んだ基礎体験活動（選択）について振り返り，今後の活動へのより良い見通しをもつことを目的として実施した．新型コロナウイルス感染症対応は解除されたが，感染症対策の観点から，分散開催により２回に分けて行った．詳細は以下のとおりである．

スタートアップセミナー 2023 実施概要

【1．目的】

⑴入学時からの基礎体験活動の取り組みを振り返ると共に，活動参加への心構えや手続き等の再確認を行う．

⑵小グループでの体験発表等を通して，体験活動で得られる多様な学びや課題を共有すると共に，今後の活動に向けて意欲を高める．

【2．対象】１年生　140 名

※上級生アドバイザー（４年生）　12 名

【3．日時】令和５年９月 28 日（木）

⑴１回目（A，Bクラス）　9：30 ～ 12：00

⑵２回目（C，Dクラス）　13：30 ～ 16：00

※「学校教育実践研究Ⅰ」のクラスとグループを活用．

※各回は 12 グループで構成し，１グループの学生数は５～６名．

※参加学生……出席とアンケート提出により３時間認定．

※不参加学生……補講（全体指導・基礎体験活動と見通し発表）とアンケート提出により１時間認定．

【4．会場】大学会館３階　大集会室

【5．日程】

1回目	9:30	9:40		10:10	10:20		11:00	11:15	11:25		11:50	12:00
	開会行事	全体指導 ・活動時間の確認 ・基礎体験活動の活動状況		休憩	グループ活動			休憩	グループ活動			閉会行事
					基礎体験活動発表会		アドバイザーからの助言		振り返り			
2回目	13:30	13:40		14:10	14:20		15:00	15:15	15:25		15:50	16:00

【6．内容】

⑴開会行事

①挨拶（教育支援センター長の話）【５分】

②趣旨・日程説明【５分】

⑵全体指導【30 分】

①活動時間の確認及び手続きについて

②基礎体験活動の活動状況について（１年生の傾向等）

⑶グループ活動　（学校教育実践研究Ⅰ・学校教育実習Ⅰの４クラス・６グループを活用）

①基礎体験活動発表会【40 分】

○自己紹介．班ごとに司会者を決定．

○全員が，これまでの体験活動内容やそこから得た学び・課題を発表し合う．

○体験活動を積み重ねることの意義について話し合う．

②上級生アドバイザー（４年生）からの助言【15 分】

○より意欲的な参加に向けて具体例に助言する（体験活動発表内容も参考にして）．

⑷本セミナーの振り返り【25 分】

①上級生アドバイザーの話を受けて，今後の活動の見通しや取り組みへの姿勢をまとめる【15 分】

②今後の活動に向けてグループ代表者の発表【10 分】（１人１分程度×６グループ選出）

⑸閉会行事【10 分】

まとめ・連絡・アンケート

スタートアップセミナーグループ協議の様子

スタートアップセミナー感想発表の様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい．

教職員の振り返り（一部抜粋）

○２時間半に短縮したことで，間延びもなく，時間的な圧迫感を感じることもなく，終始集中した時間になった．

○休憩時間も上級生アドバイザーに質問するなど，とても雰囲気が良かった．

○これまでの体験活動発表の３分間を持て余すものが多い．しっかりとした事前準備が必要である．

学生の感想（一部抜粋）

○周りの人がどんな活動にどれくらい参加しているのかが分かり，今後の目標や参考にすることができた．上級生のアドバイスを受けて，活動に参加するときの視点や活動を選ぶ時の選び方などを新たに知ることができた．

○1000 時間体験活動の重要性を確認することが出来た．失敗した時のフォローや反省，成功した時の次への生かし方などを振り返ることで意味のある活動になると分かった．

○上級生アドバイザーの話を聞くことができてとてもいい経験になった．ただ時間稼ぎのために参加するのではなく，成長できるところ，教員になったときに役に立つ力を養えるよう，常に向上心をもって活動に参加していけるようになりたい．

④　１・２年生基礎体験交流会

本セミナーは，基礎体験活動（選択）について，同学年だけでなく他学年との交流を通して

振り返り，今後の活動へのより良い見通しをもつことを目的として行った．感染症対策の観点から約 280 名（２学年分）を一堂に会することを避け，１日２回（３・４コマ）に分散して開催した．年度末が近づくこの時期に各事業所との望ましいやり取りの方法を確認するため，研修（基礎体験活動におけるルールとマナー）の内容を１つ増やしての実施とした．詳細は以下のとおりである．

１・２年生基礎体験交流会 2023 実施概要

【１．目的】

⑴個々の基礎体験活動の実績を振り返り，自己内省を促す．

⑵同学年や他学年との基礎体験活動に関する情報交換を通して，多様な学びを共有すると共に，今後の体験活動に対しての意欲を高める．

【２．対象】１年生　140 名＋２年生　142 名　　計 282 名

【３．日時】令和６年２月５日（月）

⑴１回目（Ａ・Ｂクラス）　13：00 ～ 14：35

⑵２回目（Ｃ・Ｄクラス）　14：55 ～ 16：30

※「学校教育実践研究Ⅰ」のクラスのグループをもとにした２学年合同の特別グループを編成．

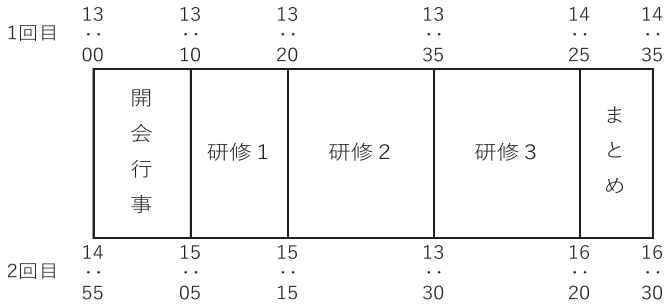
※各回は 24 グループで構成し，１グループの学生数は５～６名．

※参加学生……出席とアンケート提出により２時間認定．

※不参加学生……補講（全体指導・グループ協議）とアンケート提出により１時間認定．

【４．会場】大学会館３階　大集会室

【５．日程】



【６．内容】

⑴開会行事【10 分】

①挨拶（教育支援センター長の話）

②趣旨・日程説明

⑵研修１【10 分】

基礎体験活動の実施状況及び注意事項等（説明）

⑶研修２【15 分】

基礎体験活動におけるルールやマナー

⑷研修３【50 分】

これまでの基礎体験活動の実施状況や学び等についての情報交換等（フリップトーク）

○自己紹介

○情報交換テーマ

①取り組んできた体験活動，印象深い体験活動＆理由

②身に付いたと思う「10 の教師力」，身に付けたい「10 の教師力」とこれから

③フリートークタイム

⑸まとめ・振り返り【10 分】

感想発表，諸連絡

基礎体験交流会グループ協議の様子

基礎体験交流会全体指導の様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示す.

教職員の振り返り（一部抜粋）

○先輩の体験談を聞き，体験活動をする上での疑問点が解消され，ホッとしたのではないか.

○実践研のチームを基準としているので，顔なじみがいて話しやすい，安心したという学生からの声があった.

○話題が停滞することがあるグループがあり，適宜コーディネートをした.今後のセミナーなどでも大切だと思う.

学生の感想（一部抜粋）

○この交流会は，１回生と２回生という他学年が交流することで，自分の活動を振り返ることができ，今後についてさらに深めることができる活動だった.自分の得意なことは伸ばしつつ，苦手な部分にも挑戦し，教員として必要な能力をつけていきたい.

○１年生の時に自分が感じていた不安や悩みを抱えている後輩達がいることが分かった.どのようにしたら解決することが出来るのかということや，心配する必要がなく，楽しめば良いのだと言うことを伝えることが出来た.先輩として後輩と関わることで後輩達がこれからより多くの活動により楽しくかつより多くの学びを得ることが出来るといいなという感情にもなった.

○２回生の先輩方は，どの方も 1000 時間体験を楽しんでいるように感じた.1000 時間体験学修は，子どもと触れ合ったり，学校に関わったりして，教師力を身につけるだけに思っていたが，それだけではない，資質能力を育んだり，自分の考えを深めたりする大切な機会になっているのだと思った.交流会を経て，自分がこの１年で身につけられた教師力を振り返ることができたので，来年度はこの振り返りを活かして，新たな教師力を身につけることにも意識したい.そして，今年度身につけられた教師力はさらに磨いていきたい.

⑤　充実期セミナー

本セミナーは，２年生を対象として行う基礎体験セミナーである．入学してから１年半が経ち，学業も生活も充実してきた機会を捉えて，基礎体験活動について改めて見つめ直す場面を設定した．なお，本セミナーも分散開催により２回に分けて行った．詳細は以下のとおりである．

充実期セミナー 2023 実施概要

【1．目的】

⑴基礎体験領域でねらう資質・能力の視点から，これまでの取り組みを分析し，他者と比較しながら各自の成果と課題を明らかにする．

⑵グループ協議により，基礎体験への意欲の違いや考え方について明らかにするとともに，基礎体験がより充実・拡大していくような意欲づけを行う．

【2．対象】２年生　142 名

※上級生アドバイザー（４年生）　12 名

【3．日時】令和５年９月 26 日（火）

⑴１回目（A，Bクラス）　13：00 ～ 14：30

⑵２回目（C，Dクラス）　14：55 ～ 16：25

※「学校教育実践研究Ⅰ」のグループを解き，基礎体験活動の体験時間数（９月初旬）の様々な学生でグループ構成を行った．その際，性別と専攻のバランスも考慮した．

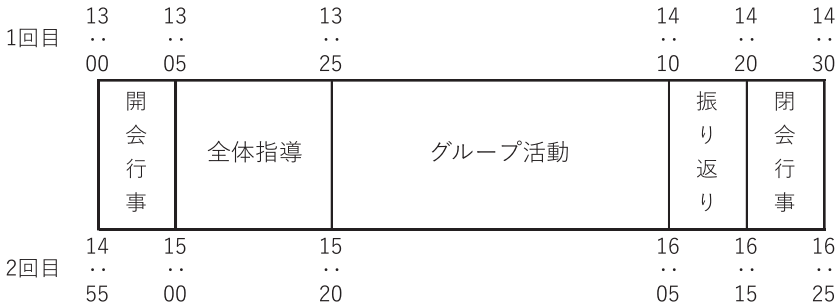
※各回は 12 グループで構成し，１グループの学生数は５～６名．

※参加学生……出席とアンケート提出により２時間認定．

※不参加学生……補講（センター長挨拶の録画視聴，全体指導，グループ協議）とアンケート提出により１時間認定．

【4．会場】大学会館３階　大集会室

【5．日程】



【6．内容】

⑴開会行事【５分】

①挨拶（教育支援センター長の話）

②概要説明

⑵全体指導【20 分】

①趣旨説明

②基礎体験領域における実施状況

⑶グループ活動【45 分】

①活動の説明，司会者の決定，上級生アドバイザー（４年生）の紹介

②体験活動発表会（活動内容，学び，課題，意義等）

③上級性アドバイザーの助言

④基礎体験活動のこれからについて（見通し，姿勢等）

⑷振り返り【10 分】

①グループ代表の発表（数名）

②まとめ

⑸閉会行事【10 分】

①班の感想発表・上級生アドバイザーからのメッセージ

②まとめ

③諸連絡

充実期セミナーグループ協議の様子

充実期セミナー上級生からのメッセージの様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい.

教職員の振り返り（一部抜粋）

○「グループの人たちの話を聞いて」や「アドバイザーの先輩の話を聞いて」など，聞くことによる学びが，多数の学生から聞こえていたように感じた.

○４年生のアドバイスがとてもよい影響を与えている.

○欠席者が多かったが，学校教育実習や集中講義などは，重複が避けられる事案であり，学部内での事前情報共有の問題であると考える.

学生の感想（一部抜粋）

○本セミナーを通して，継続して体験活動に参加する意義を学んだ.継続して参加することで，前回，前々回の体験から反省して課題を見つけ，次の体験活動で課題を解決し成長できるからだ.他の学生の，継続して参加することで，これまでは気が付かなかった自分の得意なことに気がつくかもしれないため意義があるという意見にも納得した.

○専攻が違う人や上級生アドバイザーの話を聞いて，自分がやってこなかった系統の基礎体験活動の話が聞けたので自分の考えが広がった.基礎体験は継続することで成功や失敗を積み重ね，成長していけるということを話し合った.全ての活動は繋がっていて，いずれ絶対に身になる時が来ると思うので，怠らずに続けたい.

○上級生アドバイザーからは，時間数に目が眩みがちになってしまうかもしれないが，自分の将来の為にすごくなってくると思うから，よく考えて体験なども選んで欲しいというアドバイスをいただいた．時間数は確かに大事だけれど，それよりもっと大事なことがあるということを忘れずに基礎体験に臨みたいと思えた．

⑥　応用期セミナー

本セミナーは，３年生を主対象とし，加えて昨年度「学校教育実習Ⅳ・Ⅴ」を受けなかった過年度生も対象として実施した．基礎体験活動に対する成果と課題を明らかにするとともに，よりよい進路決定に向けてこれから取り組むべきことを具体的に考える機会となるよう設定した．詳細は以下のとおりである．

応用期セミナー 2023 実施概要

【1．目的】

⑴基礎体験活動の実際を踏まえ，一人一人がこれまでの体験時間を確認し，基礎体験活動に対する成果と課題を明らかにする．

⑵学校教育実習での活動を振り返り今後の大学生活を展望するとともに，進路決定に向けての自己啓発を強く促す．

【2．対象】３年生　132 名＋過年度生　17 名　　計 149 名

※今年度「学校教育実習Ⅳ」および「同Ⅴ」履修者が対象．

※上級生アドバイザー（４年生）　25 名

【3．日時】令和５年 11 月 29 日（水）　13：30 ～ 16：00

【4．会場】大学会館３階・２階

【5．日程】

13：30	13：40	13：50	14：00	15：20	15：30	15：50	16：00
開会行事	全体指導	議①	グループ協	プレゼンテーション（15分×4回）	休憩	グループ協議②	閉会行事

【6．内容】

⑴開会行事【10 分】

①挨拶（教育支援センター長の話）

②趣旨や日程等の説明

⑵全体指導【10 分】

基礎体験活動の活動状況について

⑶グループ協議１【10 分】

自己紹介も含め，これまでの基礎体験活動等を通し，自分にとっての「成果と課題」について発表し合う

⑷プレゼンテーション【80分】

①プレゼンテーションについての説明【５分】

②プレゼンテーション【70分】

	ブース①	ブース②	ブース③	ブース④
１回目	島根県小学校	岡山県小学校	鳥取県中学校	島根県中学校
２回目	〃	岡山県中学校	鳥取県小学校	高等学校
３回目	兵庫県中学校	広島県小学校	特別支援学校	島根県中学校
４回目	〃	広島県小中学校	鳥取県小学校	高等学校

	ブース⑤	ブース⑥	ブース⑦	ブース⑧
１回目	大学院	民間企業	民間企業	公務員
２回目	〃	〃	〃	〃
３回目	〃	〃	〃	〃
４回目	〃	〃	〃	〃

※進路の内定を得た４年生25名が上級生アドバイザーとなり，８か所ブースを設け，１回あたり発表10分＋質疑５分のプレゼンテーションを４回実施.

⑸グループ協議２【20分】

現在考えている進路と志望理由，今後の準備・対策等について分からないことや困っていること等について意見・情報を交換し合う．適宜，上級生アドバイザーから助言をもらう

⑹まとめ・諸連絡【10分】

①まとめ

・参加学生４名による感想発表と，上級生アドバイザー１名から激励の言葉.

②諸連絡

応用期セミナー上級生アドバイザープレゼンの様子

応用期セミナーグループ協議の様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい.

教職員の振り返り（一部抜粋）

○各ブースの発表内容が良く練られており，大いに３年生の参考となった.就職に向けて真剣に考える，とてもよい機会になった.

○ブースのスペースが必要になるため，２階と３階の両会場が必要にはなるものの，暖房設備もあり，体育館よりも快適な環境で実施できた．

○２時間半という限られた時間内では収まりきらない内容だった．認定時間を３時間から５時間程度に増やし，実際の実施時間も増やすことが必要か．

学生の感想（一部抜粋）

○先輩からの実体験からなるプレゼンによって，将来に対する漠然とした不安が解消された．同じ学年の学生と話せたことで，進路の考えを共有できてよかった．これから何をするべきなのかがわからず，不安だったが，進路に対する気持ちが明るいものになって良かった．

○教員採用試験の内容や対策などについて，なにも知らない状態であったが，さまざまな県の状況や先輩方の対策方法，時期について学ぶことができ，参考になった．先輩方はほとんどが12月から対策を始めていたので，自分も取り組まなければならないと思った．

○基礎体験活動で自分達が学んできた事を共有することができ，学習支援などの学校の子どもたちと関わる活動を行っている学生の経験や得たものなどを聞くのは非常に良かったと感じた．また，上級生アドバイザーのプレゼンでは，私は大学院へ進学しようと考えている．大学院へ進学するためにはどのようなことが必要なのかそのプロセスや経験談などを聞くことができたので，生活リズムなどを切り替えて取り組んで行きたい．

⑦　発展期セミナー

本セミナーは，４年生を主対象とし，昨年度の未受講者も加える形で実施した．「基礎体験活動と自分，そしてこれからを考える」をテーマに，1000時間体験学修における基礎体験領域での学びを総括する機会として位置づけた．詳細は以下のとおりである．

発展期セミナー2023実施概要

【１．目的】

<1000時間体験学修における基礎体験領域での学びの総括>

一人一人がこれまでの体験時間を確認し，基礎体験活動に対する成果と影響度を協議することを通して，自分自身の学修について査察する契機とする．

テーマ「基礎体験活動と自分，そしてこれからを考える」

【２．対象】４年生　121名＋過年度生　８名　　計129名

【３．日時】令和５年９月25日（月）

⑴１回目（Ａ，Ｂクラス）　13：00～14：20

⑵２回目（Ｃ，Ｄクラス）　14：55～16：15

※「学校教育実践研究Ⅰ」のクラスとグループを活用．

※各回は12グループで構成し，１グループの学生数は５～６名．

※参加学生……出席とアンケート提出により２時間認定．

※不参加学生……補講（全体指導，グループ協議）とアンケート提出により１時間認定．

【４．会場】大学会館３階　大集会室

【５．日程】

1回目	13：00	13：05	13：15	13：25	14：10	14：20
	開会行事	全体指導	グループ協議			閉会行事
		・趣旨説明 ・基礎体験活動の実施状況	・プログラムの説明 ・アイスブレイキング	振り返りとディスカッション ・思い入れのある活動 ・身につけることのできた10の教師力 ・今後どう活かしていくか		
2回目	14：55	15：00	15：10	15：20	16：05	16：15

【６．内容】

⑴開会行事【５分】

①挨拶（教育支援センター長の話）

⑵全体指導【10分】

①趣旨説明

②基礎体験活動における実施状況

⑶グループ協議（全員参加型ディスカッション）【55分】

テーマ「基礎体験活動と自分，そしてこれからを考える」

①プログラムの説明とアイスブレイキング

②振り返りとディスカッション

ア　思い入れのある活動への振り返り

イ　身につけることのできた『１０の教師力』の振り返り

ウ　基礎体験活動を今後どのように活かしていくか

⑷閉会行事【10分】

①まとめ

発展期セミナーグループ協議の様子

発展期セミナーアイスブレイクの様子

以下，教職員の振り返りと学生の感想から本セミナーの成果を示したい．

教職員の振り返り（一部抜粋）

○基礎体験活動を通した学びの重要性を，最後の学生発表の様子から窺うことができ，我々にとっての今後のモチベーションにもなった．

○司会役が持ち回りとなっており，無役だった者が振り返り発表を行うなど，全員が役を担える見事な構成だった．

○補講対象条件と欠席理由との兼ね合いが難しい．

学生の感想（一部抜粋）

○これまで行ってきた基礎体験活動で，自分がどのようなことに成長を感じたのかについてや，周りの人がどのような活動を行い，どう感じていたのか等を知ることができ，面白かった．残り半年をどのように過ごした上で春から教師として働くのかについて，自分を見つめ直しながら考えることができた．

○基礎体験活動で今まで自分が経験してきたことを思い出したり，そこから得た学びを自分の言葉で他の人に話したりすることによって，活動中はどうしても時間を貯めることに重きを置きがちだった基礎体験活動が，自分の将来にとって意味あるものになっている，活動してきてよかったと思えるものになった．

○教員採用試験を終え，これから現場に立つ上で，これまでの自分を振り返るきっかけの１つになったように思う．他の人が積み上げてきたものも参考に，自分の伸びてきた力を再認識しつつ，まだまだ足りないところも多々あるため，今後の教職活動及び自己研鑽に対する自覚も高まった．

⑶　だんだん塾講演会

昨年度までと同様に,「だんだん塾特別講義」を実施した．講師は,学校教育現場や教育行政,社会教育現場などから優れた実践者を招聘した．【表４】のとおり，講演内容も学校教育現場に直接関わる実践的な内容や，他機関・関係者等との細やかな連携に関する内容となるよう企画し，実施した．

参加学生は主体的に取り組み，講師との質疑なども意欲的に行っていた．

【表４】　だんだん塾講演会の開催実績

回数	日時	講演者	講演テーマ	参加人数
第１回	６月21日（水） 15：15～16：55	松江市立鹿島東小学校 教諭　須田　野乃子　氏 安来市立第一中学校 教諭　増井　悠貴　　氏 島根県立大社高等学校 教諭　田城　涼介　　氏	教師１年目，２年目…そしてこれから ～現場の先生からのメッセージ～	９名
第２回	９月19日（火） 10：30～12：00	益田市立豊川小学校 社会教育コーディネーター　八川　将也 氏	社会教育士から見た学校教育の未来！	22名
第３回	２月８日（木） 14：55～16：35	米子市立淀江小学校 教諭　吉田　温子　氏	保護者と信頼関係をつくる懇談のために	23名
第４回	３月６日（水） 13：35～15：25	島根県教育庁　教育指導課 子ども安全支援支援室 企画幹　山崎　茂雄　氏	生徒指導の現状と対策～取組の光明と心得～	８名

第１回の実施状況

第２回の実施状況

第３回の実施状況

第４回の実施状況

⑷　教育支援センター演習

本演習は，昨年度まで，新型コロナウイルス感染が続く状況を鑑み，学内で参加できる基礎体験活動として開設している取り組みである．

今年度当初も昨年度と同様，以下の演習を開設し，講義・講話を聴いて（視聴して）レポートを作成したり，学習指導案を作成したりして教師力を高めていく取り組みとしてスタートした．

①　だんだん塾特別講義（全学年対象）

学校現場や教育行政等の優れた実践者の講演会を収めた動画を視聴し，レポートを作成する．

② 学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」

45分間程度，学校現場経験者と語り合うことで，学校現場で求められている力や教職の魅力，学校現場の課題，学級経営のノウハウ，生徒指導，保護者対応等について学ぶ．終了後，レポートを作成し，提出する．

③ 学習指導案づくり（４年生以上対象）

学習指導案作成をとおして，これまで学んだことを教育実践につなげたり，今後の教育実践に活用したりすることができることをめざした．

内容については，「生活科」（小学校１・２年生），「総合的な学習の時間」（小学校３年生から中学校３年生），「学級活動」（小学校１年生から中学校３年生まで），「特別な教科　道徳」（小学校１年生から中学校３年生まで）から選択し，学習指導案を作成する．

本演習は，長引くコロナ禍の中で一定の役割は果たしてきたが，落ち込んでいた募集活動数もかなり回復してきた．そのため，感染症法上の位置付けが「５類」に引き下げられる５月８日を節目として，以下の通り見直しを図ることにした．（学生通知文の内容）

1　だんだん塾特別講義【全学年対象】

○内　　容　　学校現場や教育行政等の優れた実践者の講演会動画視聴・レポート作成
○レポート提出　　各月３本まで（「動画・講演会１本につき１回のレポート提出」が原則）
指定のレポート様式（文字数の基準：１２００字以上）を使用すること
○そ　の　他　　１本につき５時間の認定

2　学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」【全学年対象】

○内　　容　　学校現場経験者と自由に語り合うことで，学校現場で求められている力や教職の魅力，学校現場の課題，学級経営のノウハウ，生徒指導，保護者対応等について理解する
教員採用試験や基礎体験活動等について質問する
○レポート提出　　上限なし
指定のレポート様式（文字数の基準：４００字以上）を使用すること
○そ　の　他　　語り合いの時間は，１回につき４５分程度
１回につき３時間＋αの認定（６月以降は５時間＋α）

3　学習指導案作成【４年生以上対象】（前期末〈９月末〉までの時限措置）

○内　　容　　**地域素材を取り入れた**学習指導案作成
「学級活動」「総合的な学習の時間」「生活科」「特別な教科　道徳」から選択
○レポート提出　　指定の様式を使用すること
６月以降は通算５本まで
○そ　の　他　　２０時間＋αの認定（６月以降は１０時間＋α）
学年（小学校・中学校），単元名，授業日，時間数は各自で設定すること
学習指導要領の内容に基づいて作成してください。

次に，今年度の実施状況を以下に記す．

①　だんだん塾特別講義（全学年対象）…動画視聴後のレポート

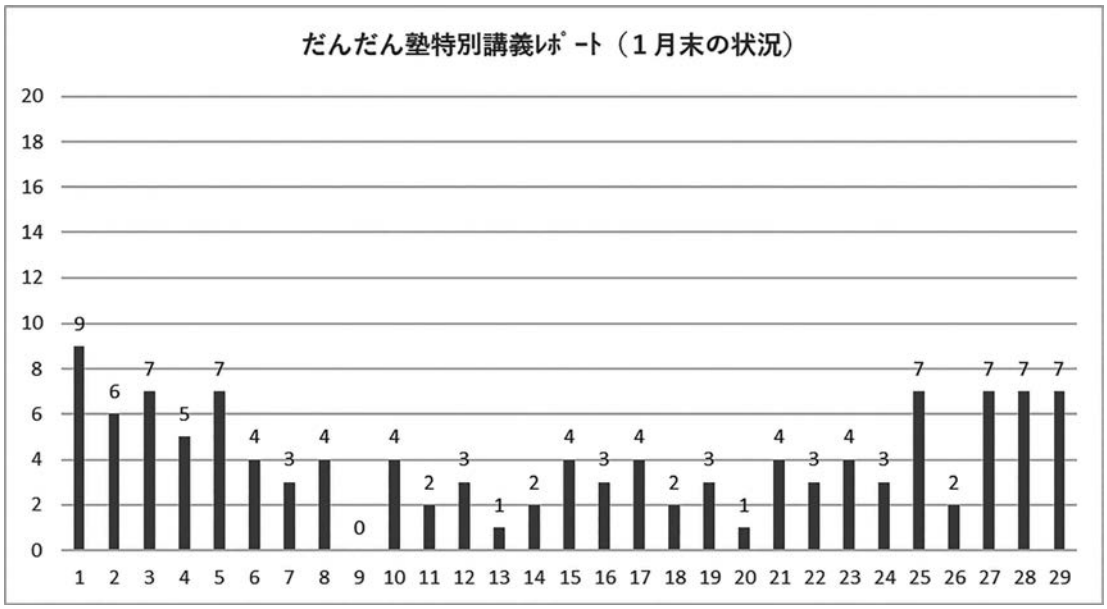
現段階で動画視聴できる内容をまとめると次のようになる.

【表５】だんだん塾特別講義一覧（テーマのみ）

№.	テーマ
1	学級経営　～グループからチームへ～
2	教職を目指しているみなさんへ
3	教育現場の実践とやりがい　～魅力にあふれる教師になるために～
4	アドラー心理学からみた教育現場への提言
5	主体的・対話的で深い学びのためのＩＣＴ利用・活用
6	少し未来の学校　～新学習指導要領とふるさと教育・教育の魅力化～
7	解決志向アプローチを活かした未来の教室
8	現場校長から大学生へのメッセージ　～教師を目指す皆さんへ伝えたいこと～
9	この世で最も素晴らしい仕事　～私が出会った３つの衝撃から～
10	甘えとストレス　～スマートな大人になるためのチェックポイント～
11	松江市の特別支援教育の状況・そして子どもたち
12	大学時代に学んだことは社会に出てから　～ 1000 時間体験学修の意義～
13	現場で即戦力として活躍するために ～今，見ておくこと．そして，すべきこと．現場校長の視点から～
14	『学習に向かう力を育てる体つくり』の実践から
15	保護者とのほっとコミュニケーション
16	学びに困難を抱える児童生徒をどう理解し，育成していくか
17	へき地校（小規模校）の学校運営について
18	～未来の先生のために～　学級づくり
19	学び合い支え合う集団づくり　～人間関係づくりの必要性を理論や実践から学ぶ～
20	教育現場の実務と基礎体験活動のつながり
21	めざせ！教職
22	社会人に向けてステップアップ！ ～就職活動に係る面接試験の接遇や教員採用試験に向けた基礎知識等から学ぶ～
23	保健室から見えてくる学校の今
24	GIGA スクール構想や ICT 活用の具体内容を学ぶ　～教育行政や学校現場での取組を通して～
25	仕事ってなんのためにするの？
26	自分を変える～接遇スキルを強い味方に！～
27	いじめの未然防止につながる人権教育
28	アルゼンチン日本人学校から見た日本と教育
29	教育実習や基礎体験活動等に役立つロジカルシンキングとは

上記の内容を視聴し提出されたレポートの総数は 118 本となった（１月末時点）.

テーマごとに提出されたレポートをまとめると次のようになる.



【図２】　だんだん塾特別講義レポートの提出状況
（縦軸レポート数．横軸テーマのナンバー）

ひとつの内容ごとに，平均約 4.1 本のレポートが提出されており，コロナ禍中であった昨年の 9.3 本から大幅に減少した．№1 のレポートが９本と，今年度は一番多くレポートが提出された．

② 学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」（全学年対象）

一昨年度より，教職大学院及び学部附属教師教育研究センターと連携し，対応できる教員数を増やして体制を整えている．

【表６】　学校現場概論「学校現場経験者の先生と語り合おう」担当者等一覧

学校現場で求められている力、教職の魅力、学校現場の課題

	担当者（所属）	これまでの勤務校（主なジャンル）
１	錦織　稔之 （教員支援センター）	中学校 （社会科、ふるさと教育、博物館連携、進路指導）
	nishikori-t@edu.shimane-u.ac.jp	
２	村尾　美幸 （教員支援センター）	小学校 （児童理解、保護者対応、仲間づくり、特別支援，学級経営）
	muraomi1216@edu.shimane-u.ac.jp	
３	上代　裕一 （教員支援センター）	中学校（生徒指導（AD 理論）、学級経営（QU の活用）、危機管理（クレーム対応）、教育相談（ブリーフカウンセリング）、部活動、保健体育）
	y-jodai@edu.shimane-u.ac.jp	

4	飯島　仁 （教員支援センター）	小学校、中学校（学校安全、学級経営、保健体育科教育、児童生徒理解、学習指導案（道徳，学級活動））
	iijima@edu.shimane-u.ac.jp	
5	山中　慎嗣 （教員支援センター）	小学校、中学校 （ふるさと教育、コミュニティスクール、地域連携）
	yamanaka@edu.shimane-u.ac.jp	
6	原　広治 （教職大学院）	小学校、特別支援学校 （特別支援教育（子ども・保護者支援））
	hara-hiroji@edu.shimane-u.ac.jp	
7	船田　次郎 （教職大学院）	中学校 （教科指導、学級経営、生徒指導、生徒会活動、部活動）
	funada-j@edu.shimane-u.ac.jp	
8	三島　賢隆 （教職大学院）	特別支援学校 （聴覚、知的、教育相談、特別支援教育コーディネーター）
	mishima-yoshitaka@edu.shimane-u.ac.jp	
9	藤原　建 （教職大学院）	中学校 （生徒指導、保護者対応、保健体育）
	fujihara_tk@edu.shimane-u.ac.jp	
10	齋藤　英明 （教職大学院）	小学校、中学校、特別支援学校、義務教育学校 （授業づくり、学級・学校経営、特別支援教育）
	hideaki@edu.shimane-u.ac.jp	
11	安野　洋 （教職大学院）	中学校 （教科教育、学級経営、部活動、青少年の健全育成）
	yasuno-hiroshi@edu.shimane-u.ac.jp	
12	吉田　博幸 （教師教育研究センター）	小学校 （体育、学校経営）
	hyoshida@edu.shimane-u.ac.jp	
13	長岡　素巳 （教師教育研究センター）	中学校・高等学校 （生徒理解と集団づくり、社会科（中学校）、地歴・公民科（高校））
	mnagaoka@edu.shimane-u.ac.jp	

学校現場経験者の教員との対話を終え，学生から提出されたレポート数はわずか１本だった．レポートのテーマは，「教育相談の理論」であった．

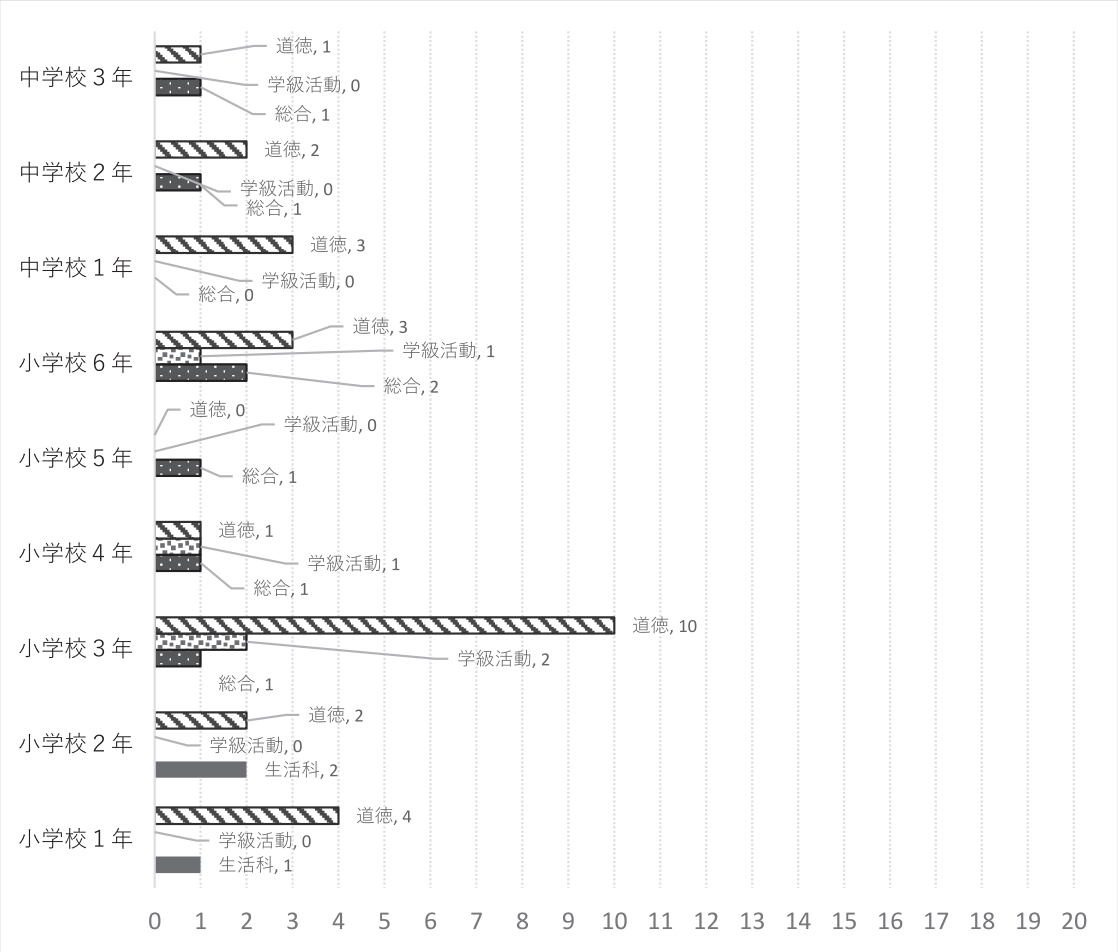
学校現場概論を申し込む学生は，自己課題をもちながら積極的に教員と対話を行い，レポート作成などで振り返ることができる．しかし，やや広報などが十分でないことが影響し，希望者がいない状況だった．一方，３年生の終わりから教員採用試験等就職に関する相談数が増加しており，その中で，それぞれの教員から専門とするジャンルに関しての内容理解を深めている状況も窺える．今後，適切な時期の広報等を行い，学生の自己課題を追究していく機会を保障するように努めていこうと考えている．

③　学習指導案づくり（４年生以上対象）

総数 40 の学習指導案が提出された（１月末時点）．各教科の学習指導案数は次のとおりである．

教科名	学習指導案数
「生活科」（小学校１・２年生）	3
「総合的な学習の時間」（小学校３年生から中学校３年生）	7
「学級活動」（小学校１年生から中学校３年生まで）	4
「特別な教科　道徳」（小学校１年生から中学校３年生まで）	26

学年ごとの提出状況については次のとおりである（【図３】）．



【図３】　設定学年ごとの提出状況

提出された学習指導案の総数は 40 本であり，昨年度の 170 本を大きく下回った．前述した５月８日以降の見直しにより，時限措置はあるものの４年生対象であること，提出本数（５本まで）があること，などにより大きな減少となったと考えられる．

「生活科」の学習指導案についても，小学校の１・２年生と学年は限られているが提出数はわずか３本に留まった.

「特別な教科　道徳」の学習指導案については，学年平均約 2.9 本の提出があり，小学校第３学年（10 本）が一番提出数が多かった.

「学級活動」（４本)，「総合的な学習の時間」（７本）の学習指導案については，全体の提出数自体が一桁（昨年の提出数の５分の１）に留まった.

全体の提出数が少ない中でも，「総合的な学習の時間」については，指導に要する時間数が多くなることから長期間の「指導計画」を構成することが求められ，そこに困難さがあるものと思われる.

また，「学級活動」の学習指導案については，１単位時間の計画となることが多いものの，前後の指導との関連，児童生徒の実態と指導内容との関連などについて十分に検討できていない状況が窺えた．今後も引き続き状況に応じた指導を適切に行うようにしていきたい.

教育支援センター演習については，前述のとおり，新型コロナウイルス感染症が感染症法上の「５類」に引き下げられる５月８日を節目として，見直し（対象学年や提出本数など）を図ったことや，基礎体験活動において，対面活動や宿泊も伴う活動が再開され，本格化したことにより，いわば机上で行う演習としての実績が積み上げられなかったと考えられる．一方では，基礎体験活動の一環として学生に定着しているものと考えることができる．それぞれの学生の課題追究を深めたり，広げたりする機会として今後も工夫しながら継続していくよう努めていきたい．また，レポートや学習指導案については適宜，個別指導等を行い，学生の教育への認識が深まるようにしていこうと考えている.

以下，学生の感想から本演習の成果を示す.

学生の感想（抜粋）

「だんだん塾特別講義」感想レポートから（「学級経営」）

学級経営は生徒理解を基盤とし，観察や日記面談など様々な方法での教員と生徒の日常の触れ合いを基盤としていることが分かった．何気なく提出していた中学校時代の連絡帳の日記も学級経営に繋がっていたんだと思った．アンケート QU というのは初めて聞いた．アンケートをとることで，生徒がどのように感じているのかや居心地の良いクラスにするにはどうしたらよいのかなどが分かるので良いと思った．特に最近では SNS でのつながりが発展しているので，教師からは見えにくい部分で実は居心地の悪さを感じているという生徒もいると思うのでそれを見つけ出すためにも取り入れていくべきだと思った．すべての生徒と一日１会話というのが良いなと思った．学校教育実習Ⅳに行くときや教師になった時にできるように心がけてみたいと思う.

教室は毎日の生活の場であるため，その環境も学級経営に大切になってくると分かった．きれいな環境を整えていればよいのかと思ったら，それだけではなく，掲示物の工夫も大切になってくることが分かった．また，他学級との連携の学級経営において必要なことだと知り，意外だった．学級間の連携を密にして協力し合うことが大切になってくると分かった．成功事例や失敗事例を共有して共に良いクラスになれるようにしていくことが大切だと分かった．学年集会などもこれに繋がっているのかなと考えた.

「だんだん塾特別講義」感想レポートから（「アルゼンチン日本人学校から見た日本と教育」）

ブエノスアイレスの日本人学校について，動画の中では現地の言葉について学んでいる時間があり，自分の住んでいる国について学ぶことのできる機会があり良いことだと感じた．また，書道といった日本でもある授業を子どもたちが同じように受けていることが分かった．アルゼンチンについて，日本と12時間も時差があり，季節も真逆であるため実際に行ったときに困ることが多そうだなと感じた．実際の風景で，外でタンゴをしていたり，民族舞踊をしていたりすごく楽しそうな国だと感じた．ワインの価格が水ほどの安さであることにびっくりした．大学の写真を見て，日本の大学は緑が多いイメージだが，アルゼンチンの大学は大きい建物が１つあるように見えて，国が違うだけで大学の雰囲気も違うなぁと感じた．くらしの様子で，公園の芝に寝転んでいる様子は日本ではあまりないのでびっくりした．山などの自然が多くきれいな景色が見られる場所だと感じた．日本との暮らしと比べると日本は放課後の部活や残業があることが大変だと感じた．外国にある日本人が通っている学校には「日本人学校」だけでなく，「補習授業校」もあることが分かった．〈中略〉今回，話を聴く中で私は小学校の時にエジプトの日本人学校に行った先生を思い出した．その時は,「どうしてエジプトを選んだのだろう」と思っていたが, 実際は派遣先を選び日本人学校に行っているわけではないことを聞いて私の先生もそうだったのかなぁと感じた．また，派遣先からの写真でピラミッドと写した写真を見せてもらったことがあり，今回の講演会での話しで感じたことも含めて，外国にある日本人学校に行くことは教員としての力がつくだけでなく，自分自身の新しい経験や今までなかった価値観に気づくことのできる機会であると強く感じた．教員になることが出来たら，外国の日本人学校に行ってみたいと感じた．

「学校現場概論」感想レポートから（「教育相談の理論」）

島根県中学校教諭として長年勤務経験がある先生に教育相談の理論について，お話を伺った．教育相談について，文部科学省が示す生徒指導提要を中心に，実際の現場で遭遇する場面を想定しながら指導を受けた．生徒指導提要は，令和４年度に発行されたものは用語が難しく，解説も少なかったことから，再度，一つ前のものを中心に基本的な用語の解説も含めて確認することが今後の課題であることを認識した．子どもたちは学校に適応できず，学級崩壊などを招くことがあり，一度学習が抜けると今後も該当箇所のみ抜けてしまう可能性もあるため，対応が必要である．子どもたちは愛着がない子どもも多数いることが分かったが，学校内でも，廊下ですれ違う際に声掛けをし，軽く「どうしたいのか」など声掛けをするだけで，大きな違いがあることが分かった．机を介した面談だけでなく，場面を変えた教育相談も有効であることを認識した．来年度から，学校現場で実践したい．

２．学内資格認定制度

教育支援センターでは,「体験学修ピア･サポーター」「学校教育サポーター」「コミュニティサービス･サポーター」の３つの学内資格を設定している．今年度の認定者は延べ22名であった．（【表７】参照）

【表７】 学内資格認定者数

学内資格名	認定者数	学年別人数
体験学修ピア・サポーター	10 名	３年生　３名 ４年生　７名
学校教育サポーター	６名	４年生　６名
コミュニティサービス・サポーター	６名	３年生　１名 ４年生　５名

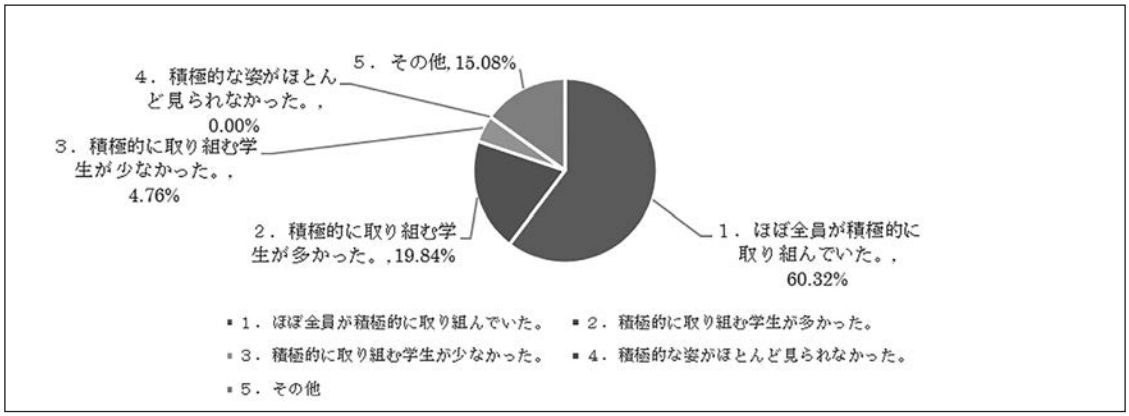
３．各受け入れ先との連携

新型コロナウイルス感染症対策のため中止としていた「基礎体験活動連絡会議」を再開するに当たっては，事前に今年度の取り組み状況などに関するアンケートを行った．

⑴アンケート調査結果

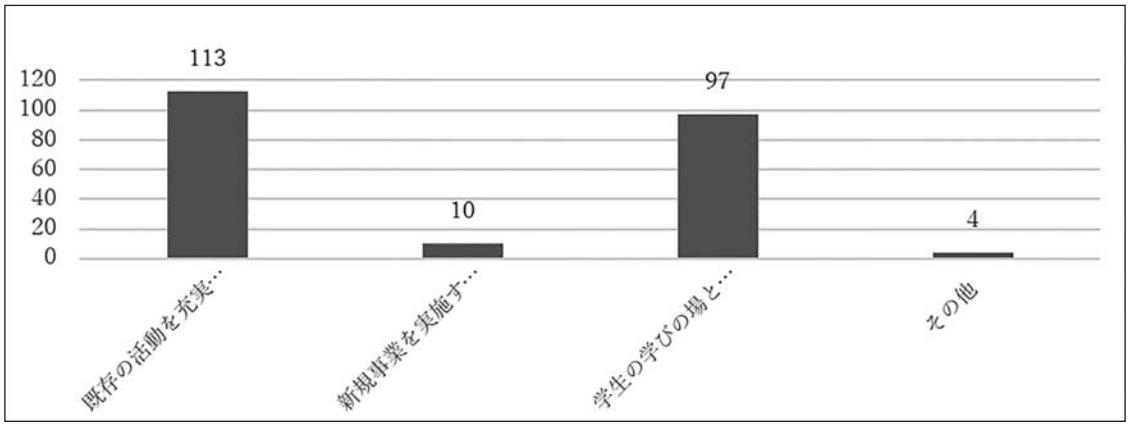
160 団体にアンケート調査の依頼をし，129 団体から回答（２月 20 日現在）があった．（回答率 80.6％）

《アンケート結果①「学生が体験活動に積極的に取り組んでいたかどうか」》



「ほぼ全員が積極的に取り組んでいた」及び「積極的に取り組む学生が多かった」を合わせると，80.16％になった．一方，「積極的に取り組む学生が少なかった」という意見も 4.76％あることから，事中指導などの機会を利用し，個別へのサポートを図る必要があるものと考える．

《アンケート結果②「学生を受け入れるにあたり，どのようなお考えをお持ちでしょうか，お聞かせください」（複数回答可）》



「既存の活動を充実させるための受け入れ」とするのが113団体,「学生の学びの場としての活動提供」が97団体となっていた.

受入団体の既存の活動を一層充実させることと，学生の学びの場としての活動機会を保障することとの両者の関係を保持していくことが，持続可能な地域社会との繋がりとなり，学生の確かな「教師力」構成へと結びついていくようになると考える.

《アンケート結果③自由記述より》

回答の中で特に多かったのが,「連絡をしても,学生からの返答がない」というものであった.この点については，かねてからの課題でもあり，各学年のセミナーや，事前・事後指導などにおいて継続的に指導を続けているところである．今後も，指導内容を工夫したり，学生が主体的に考えたりする機会をつくるなどして課題解決に向けて取り組むこととしたい.

⑵基礎体験活動連絡会議

「基礎体験活動連絡会議」の開催に当たっては，多くの受入団体が参加できるようにと,「米子会場」（３月８日開催）と「松江会場」（３月13日開催）に分けて行った.

【日程・内容】

13:45	14:00	14:20	14:50	15:00			15:30	15:45	15:50	16:05
受付	開会	【説明】	休憩	学生発表（30分）			全体質疑応答	閉会	希望個別相談
	あいさつ・意義経緯	「今年度の状況・課題」		①	②	③			
15分	20分	30分	10分	10分	10分	10分	15分	5分	15分

【米子会場】

13名の参加者があった．はじめに教育支援センター長から「基礎体験活動」の意義やこれまでの経緯などについて説明を行い，次に教育支援センタースタッフから今年度の状況や課題などについての説明を行った．その後,以下のとおり学生発表を行った.

「米子会場」においては，鳥取県での活動を中心に３名の学生が発表.

①「加茂中学校学習支援について」　…保健体育科教育専攻３年生

②「米子市こども☆みらい塾の活動を通して」　…特別支援教育専攻３年生

③「３年間の活動内容とその成果～学びの多様性～」…小学校教育専攻３年生

【松江会場】

43 名の参加者があった．米子会場と同様に基礎体験活動の意義や経緯，今年度の現状等についての説明を行った．その後，以下のとおり学生発表を行った．

「松江会場」においては，島根県での活動を中心に３名の学生が発表．

①「島根大学教育学部 1000 時間体験学修について
　～子どもたちの関わりに焦点を当てて～」　…小学校教育専攻３年生

②「子どもの支援のあり方を学ぶ
　～のびのび児童クラブでの活動を通して～」…音楽科教育専攻３年生

③「大人から子どもまで
　～『しまね家庭の日』で美術と関わること」…美術科育専攻３年生

Ⅲ　おわりに

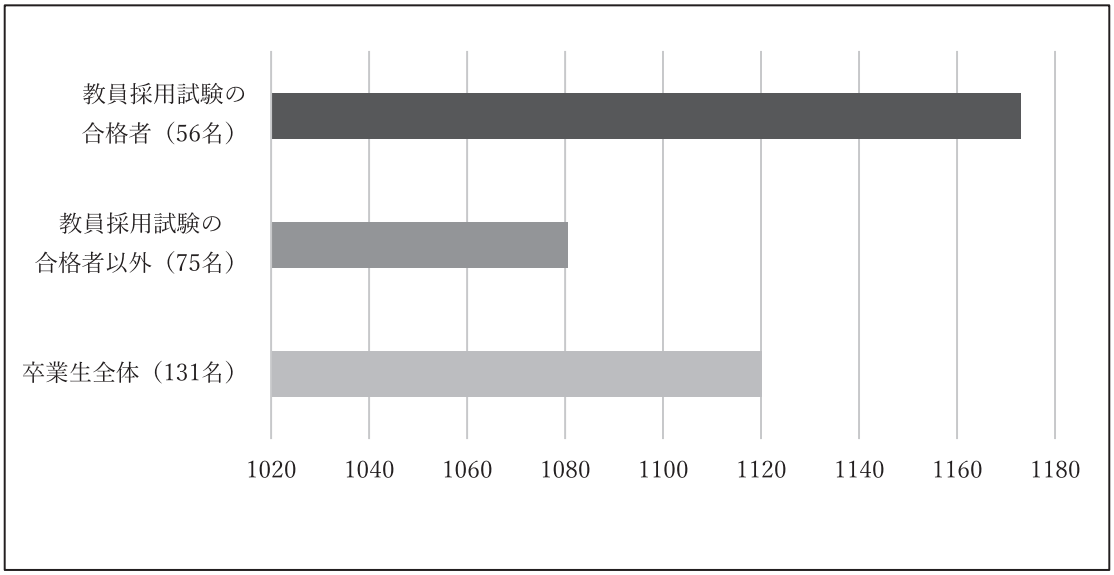
令和５年度は，新型コロナウイルスの感染症法上の分類が５月８日に見直されたことに伴い，大学の行動指針も０（通常）となり，ようやく平常時の教育活動を推進できる状況に戻った．学外での活動が主体となる基礎体験活動にとって，これまでのコロナ禍の３年間は活動制限を余儀なくされ，本学部の特色というべきこの教育活動を充分に提供できないもどかしさもあった．受入先と連携して感染予防対策を講じたこと，また学生が学内や自宅で体験できる「教育支援センター演習」を新設したことなど，学修機会を提供できるよう苦心しながら努めてきた．

平常時の教育活動を推進できる状況に戻った今年度は，宿泊を伴う活動への参加も解禁し，３年次後期の「実習セメスター」も再開した．これにより，隠岐での宿泊を伴う「スクール・インターンシップ」も再開することができ，離島地域の教育状況を体験的に学ぶ機会を提供できるようになった．なお，この「スクール・インターンシップ」はこれまで山陰両県内の学校に限定していたが，今年度初めて，学生の母校であれば山陰両県以外であっても行えるように道筋をつけた．山陰両県以外の出身者は，その多くが郷里に帰って教員になりたいという意向が強いため，出身都道府県の学校の状況や教育の特色に触れることができた経験は，必ずや彼らの進路選択にとって有意義な機会になったであろう．

【図４】に示した卒業生の平均体験時間数を見ると，今年度卒業生の平均体験時間数は約 1120 時間であり，昨年度の約 1115 時間を若干ながら上回った．ただし，コロナ禍以前の平均値が約 1200 時間だったことを考えると，やはり入学時からの３年間がまさにコロナ禍の渦中であったことの影響を感じざるを得ない．その中でも，教員採用試験合格者 56 名の平均体験

時間数は約 1173 時間に及んでおり，基礎体験活動を積み上げてきたことが教師力の育成に大きく寄与したであろうことは十分推察される．なお，総体験時間数の上位４名はいずれも教員採用試験の合格者であり，栄えある１位の学生の総体験時間数は実に 1980.5 時間であった．

今後も我々教育支援センター教職員としては，子ども・地域・学校とのかかわりを通して実践的に学ぶ基礎体験活動のさらなる充実に努め，教員に必要な社会性や豊かな人間性を学生たちが身につけていくことを支援していきたい．



【図４】　令和５年度卒業生の平均体験時間数